

# 体育授業における競争の指導

## －第3・4学年「かけっこ」の実践を通して－

島 本 靖

### 1 基本的な考え方

体育授業がスポーツを素材にそれを教材化することから、児童が体育授業で競争をどう学ぶかとの問題を避けて通ることはできない。たとえば、児童の活動意欲を喚起する手段として競争を教材づくりの俎上に載せたとしても、児童の競争に関わる見方・考え方に一定の作用を及ぼすことになる。しかしながら、学校の授業実践においては、多様な競争形態による経験や活動が重視され、児童は競争の結果に一喜一憂するだけである。この傾向は、短距離走のように指導しても技術の向上があまり期待できないと考えられている教材ほど顕著であるといえる。

そもそもスポーツの競争は、競争に参加することそのものが意義を持つ個性的で協同的な「競い合い」の第一の過程と、その「競い合い」の結果の一部を記録し特定の共通の尺度に基づき序列化する第二の「記録・得点」と「勝敗」の過程、さらにはその「勝敗」が褒章や成績などの外在的価値を伴う「順位・序列」という第三の過程に区分される（森敏生, 1998）。本研究は、この第二の過程を踏まえて、第一の「競い合い」の意味に児童が気づくことを目指した実践をもとに、運動技能の向上と競争に関する見方・考え方の変化との関連について考察する。ここでは、運動技能の向上と競争に関する見方・考え方の変化を典型的に示したと思われる児童の事例を取り上げ検討した。

### 2 実践の概要

実践については、単元「かけっこ」を取り上げ、複式中学年（3年生男子3名、女子4名、4年生男子4名、女子4名計15名）を対象に、短距離走の授業を8時間実施した。

競争形態については、3年生と4年生の混合による2つのグループ（男女混合の7名、8名）による1名対1名の対抗戦にした。授業はすべてビデオカメラ1台もしくは2台を用いて記録し、授業を分析する資料として、事前・事後アンケート（技術、競争観に関することなど）、毎時授業終了後の反省カード（学習の楽しさ、技術、競争観に関することなど）、グループの記録カード（個人の着順、得点、グループの得点、順位）、第1時、第8時における40m走の記録、第7時授業の教師と児童のすべての発話記録を活用した。

#### (1) 指導目標

- ① 速く走るためには、重心を高くした走法が有効であることを理解し、その技能に習熟することができる。（到達目標）
- ② 多様な競争形態を経験しながら、競争について多面的に把握し、その見方・考え方を広げたり深めたりする。（方向目標）
- ③ 友達の意見を尊重したり、グループで役割分担したりしながら、協力して学習する。（方向目標）

#### (2) 単元構成と指導内容（全8時間）

- ① オリエンテーション、事前アンケート…………… 1時間
- ② 相手がだれになるかわからない競争…………… 1時間
  - ・速く走るためには、重心の高い走法が有効であることを理解する。
- 走力に合わせてスタート位置を変える競争…………… 2時間
  - ・重心の高い走法はストライドが大きいことを理解し、重心の位置を意識して練習

する。

- ・腕の引き上げに意識焦点を置くことにより、重心の高い走法に習熟する。

できるだけ走力の同じ相手とする競争…………… 2 時間

- ・手首や肘に意識焦点を置いた力強い腕振りによって、重心を高く保持したストライドの大きい走法に習熟する。

- ・腕の振り下ろしが次のストライドにつながることを理解し、力強い腕の振り下ろしを意識した練習をする。

③ 教室で技術と競争について考える…………… 1 時間

- ・重心の高い走法とその周辺の技術についてまとめ、競争について話し合う。

④ まとめ、事後アンケート、記録測定…………… 1 時間

### 3 結果と考察

#### (1) 技術に関する知識の習得

事前アンケートでは、「腕を大きく振る」という回答が最も多く、ついで「地面を蹴る」「足を高く上げる」「腕を横に振る」「腕を速く振る」などが多かった。腕部や脚部の動かし方、姿勢に関する事柄だけでなく、抽象的な事柄を含めた広範な内容が記述されている。事後アンケートでは、「腿を上げる」が最も多く、ついで「腰を上げる」「肘、腕を大きく振る」「腕を振り上げる」「一步を大きくする」となり、これらの腕部や脚部の動かし方、姿勢に関わる具体的な技術に記述が集中している。これは、「手首や肘に意識焦点を置いた力強い腕振りによって、重心を高く保持したストライドの大きい走法に習熟する」などの各時の授業における技術課題と連動している。「こしを上げる、手を流さないように振る、腿を上げる→一步が大きくなる」や「こしを高くして、手をふり上げて、手をふり下げて、腿をしっかり上げると、一步が大きくなって、手をふり下げることによって、ける力が入る」などの児童の運動技能に関する記述は、それぞれの腕部と脚部の動かし方を関連づけて記されている。

これらのことから、今回の学習を通して「速く走るためには、重心を高くした走法が有効である」という内容が、3年生にも4年生にもより深く理解できたといえる。

#### (2) 運動技能の習熟

図1は、本学級で最も記録の向上が認められた児童の走フォームの比較である。この度の学習では、重心を高く保持した力強いストライド走の習得できた児童ほど有意な走力の伸びが認められた。それは、腕振りを横振りから縦振りにし肘を引き上げることによって、上体が起きることと連動している。反面、図2のように記録の向上しなかった児童も認められた。フォームの習得を意識するあまりいわゆる快調走となり、力強い疾走感が得られなかったものと考えられる。

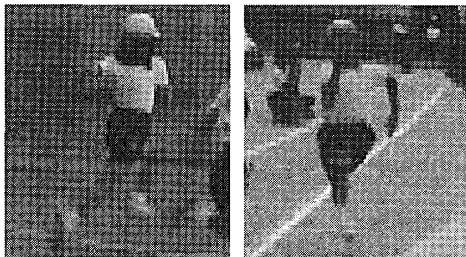


図1 最も記録の伸びた向上した児童  
(第1時と第5時の比較)



図2 記録の向上しなかった児童  
(第1時と第5時の比較)

表 40m走記録の学習前後比較

| 3 年 生 |      |       |          | 4 年 生 |      |       |          |
|-------|------|-------|----------|-------|------|-------|----------|
| 番号性別  | 第1時  | 第8時   | 記録の伸び    | 番号性別  | 第1時  | 第8時   | 記録の伸び    |
| 1 男   | 7.3  | 7.0   | 0.3      | 1 男   | 7.4  | 7.1   | 0.3      |
| 2 男   | 7.9  | 7.7   | 0.2      | 2 男   | 8.9  | 8.5   | 0.4      |
| 3 男   | 8.1  | 8.0   | 0.1      | 3 男   | 8.0  | 7.6   | 0.4      |
|       |      |       |          | 4 男   | 7.2  | 7.1   | 0.1      |
| 4 女   | 8.1  | 7.8   | 0.3      | 5 女   | 8.1  | 8.0   | 0.1      |
| 5 女   | 8.2  | 8.4   | -0.2     | 6 女   | 8.2  | 7.4   | 0.8      |
| 6 女   | 8.1  | 7.5   | 0.6      | 7 女   | 8.6  | 8.5   | 0.1      |
| 7 女   | 8.7  | 8.3   | 0.4      | 8 女   | 8.0  | 8.0   | 0        |
| 平 均   | 8.06 | 7.81  | 0.24     | 平 均   | 8.05 | 7.78  | 0.28     |
| 標準偏差  | 0.42 | 0.48  | 0.25     | 標準偏差  | 0.56 | 0.57  | 0.26     |
| t 値   |      | n = 7 | 2.563    | t 値   |      | n = 8 | 2.986    |
| 有意確率  |      |       | p < 0.05 | 有意確率  |      |       | p < 0.05 |

### (3) 競争に関する見方・考え方

抽出児のA児（表の4年生女7）は、多様な競争を行うことによって、その競争に関する見方・考え方を大きくゆさぶられた児童である。走力が相対的に低く、事前アンケートから競争に対して否定的な回答を示していた。自分にとっての競争の意味・価値について、努めて自分なりの意見を明確にしようと心がけており、比較的勝ち負けの成績は良く（3勝1敗1分け）、記録も8.6秒から8.4秒（単元における最高記録）に伸びた児童である。

A児は、事前アンケートで「かけっこは好きでも嫌いでもない」「（競争はきらい）足が遅いので自分のタイムと人のタイムを比べてしまって自信がなくなってしまう」「走ることにあまり自信がない」と答え、自分の走力を自覚しながら学習に対しては消極的な姿勢がうかがえた。また、第1時に「（競争では）借り物競走がしたい」と述べ、ここでも自分の走力が高くないことを十分に認識していることがうかがえる。

第2時「だれとするのかわからない競争」では、「タイムで相手を決めて競争してみたい」と発言する反面、「自分のめあてはタイムを伸ばすこと」「タイムもうれいことに0.1秒伸び」「タイムをもっと伸ばして」と、自分の記録への関心が高いことが読み取れた。

第3時「走力に応じてスタート位置を変えてする競争」では、「5目盛前だったけど、自分より速い人に勝ててとてもうれしかった」と記しながらも、「後ろから人が近づいて来るという感覚があって速く走れた」と発言している。授業の中のみinnで考える場面では、この競争を肯定的に受け入れている様子であるが、学習後の記述には「同じところからスタートして勝ちたいです」と書かれている。後ろからスタートした相手に追いつかれないように逃げるこの競争の特質が意識しながら、教師が設定したこの競争形態に積極的な意義を認めているものと考えられる。

第4時では、「走力に応じてスタート位置を変えてする競争」が平等か、不平等かという話し合いになる。A児は、どちらかよくわからないとしながら、「0.1秒縮まったので、同じ距離のところから走って差を縮めて本当に同じ距離のところから勝てるようになりたい」と同じスタート位置で同じ距離を走り、自分の記録を伸ばす競争を志向している。そして、「（前から走って勝っても）うれしいんだけど、なんかそれで納得しないというか、ちゃんと勝ちたい」「後ろにいる人に悪い気がして、前から走るの悪い」「やっぱり同じスタートから走って、自分の力と人の力をぶつけ合って走ってみたい」と発言・記述し、競争が楽しくなかったと回答している。これまで教師が設定した競争に対して、不合理や矛盾を感じながらも、なかなかそれを声に出していえなかった状況があったものと思われる。

る。しかし、前時学習カードに自分が記したことが、授業で問題提起として取り上げられたことによって、自分の競争に関する見方・考え方を明らかにするようになっている。

第5時「できるだけ走力の同じ相手とする競争」では、自分とほぼ同じ走力の相手と競争し引き分けている。A児は、「絶対負けたくなくて、その人が自分の前に行ってほしくなくて一生懸命走った」「同じような人だけには勝ちたい、勝てる人には勝ちたい」と相対的に自分が有利と考えていた競争で引き分けたことに対して、感情的になり悔しさを表している。また、この結果を受けて、「自分のタイムが縮ませられた」「絶対負けたくなくて一生懸命走って、タイムが0.2秒縮んだ」「8.0になりたい」など、自分の記録の向上を目標にしている側面も見受けられる。これまで、競争の第一の意義を自分の記録を伸ばすことと考えてきたA児が、勝てそうな相手との競争が予想通りにならなかったことによって、結果としての勝敗に意義を感じるようになり感情を揺り動かされている。

第6時も前時と同じ相手との競争であったが、今度は勝つことができた。競争の感想で、「勝ちたいとは思っていたんだけど、そうなるとその気持ちがなくなって」「タイムも縮まらなくて、それを知ったら悔しくて、ずっと走っているときに何のために速くという理由をずっと忘れずに走ったらいい」と述べている。また、競争は楽しくなかったとし、その理由として「自分は満足した。でも、いっしょに走った人に『ありがとう』とでも言ったらよかった」と後述している。そして、「タイムを8.3秒にしたいです」と次の目標を設定している。前時において、勝てると思っていた競争に勝てなかった悔しさが、A児の競争観を大きくゆさぶる強い勝利志向へと傾くことになる。しかし、次の競争で同じ相手に勝ったことが、自分にとっての競争の意味や価値について改めて問い直す契機となっている。また、走力の低い競争相手に対して、同じように追いかけられる立場になって考えている。つまり、自分のタイムを少しでも伸ばすために競争しているA児にとって、競争の意味は結果として勝つことよりも、競い合うことにあるといえる。共に競い合い共に記録を伸ばし合う関係、すなわち協同し合う関係をこの時強く意識したものと考えられる。

第7時の教室で行われた授業では、競争にはふたつあるとしながら、「自分ががんばらずに負けた時とか、がんばって負けた時とかあって勝ち負けを決めて、もうひとつはタイムが速くなったら勝ちというのがあって、負けたらダメとかそういうことだけではない」と発言する。ここでは、競争は相手と勝ち負けの結果を決める競争と、相手と競い合って自分の記録を伸ばす競争があり、共に自分の技能を高めていくことが重要であるとのA児の競争観が、明確に表れている。また、このようなA児の競争観が技能の向上と結びついていることが、「8.5秒になった時はとてもうれしくて、次に8.4秒になった時は8.5秒になったときの走りを見習って走りました」「いい走り方は決まっているのだなと思いました。これからいい走り方をして走ろうと思いました」という記述からも読み取れる。

事後アンケートによる単元のまとめで、A児はさらに自分の競争に関する見方・考え方を明確にしている。「いやだった競争は、スタートを変えた競争」としながら、「人の背中を見て走ったりしていて、タイムが縮まったらいい」「後ろを走っても一生懸命やれば満足できます」と記述している。そして、「自分が前を走ると後ろを走るとでは、気持ちがちがいます」と言及している。このように、A児はまず自分の記録が0.1秒伸びたことを客観的な記録計測と伸びた実感の両方で確認し、それが単元の目標を技能の習熟による記録の向上へと方向づけたと考えられる。A児にとって、自分の記録を伸ばすために競い合う過程を保障する競争こそよい競争であり、結果としての競争は無意味なことと頭では理解していたといえる。しかしながら、同じように技能の低い相手との競争になると、優勝劣敗との意識が表面化し、これがA児にとって競争観への大きなゆさぶりになって作用した。A児は、自分よりも遅い相手の立場で考えながら、共に自分の記録向上を目指して学習し

ていることを確認することによって、この課題を解決したといえる。

この事例から、みんなの技能の向上を保障する協同的な学習を展開するために有効に機能するよう、技能の低い児童も高い児童も自分の記録向上に意義を感じることでできる競争の形態を優先することが重要であると考えられる。それは、結果としての勝敗ではなく、競争の過程の「競い合い」こそ有意義であるとの見方・考え方に支えられた競争観を児童に形成するために教材として用いる運動が持つべき原則と思われる。

#### 4 まとめ

A児の学習過程から、技能の向上と競争に関する見方・考え方の変容との間に一定の関連が検証できたと考える。それは、技能の習熟に伴って、勝ち負けによる他者との相対的な競争観から、自分の記録を伸ばすことを中心とした絶対的な把握による競争観への変化である。こうした傾向は、特に技能の低い児童ほど顕著であったと考えられる。

自分の技能が向上している実感は、客観的な記録と自分の動きの感覚、他者からの評価などによって得られ、特に計測記録は児童の技能把握の絶対的な拠り所となる。相手次第である競争の勝ち負けからは、技能の向上を客観的に把握することはできない。この自分が確かにうまくなった・上手になったとの実感が、学習意欲につながり、児童は自分の技能を向上させることに没頭していった。したがって、そこでの競争の意味や価値は、自分の技能を向上させるための「競い合い」であり、序列化された順位ではない。競争の過程における「競い合い」の保障された競争や、結果として自分の技能を確かめられる競争の形態が、本授業の目標を達成するために必要な競争であったといえる。また、このように技能の向上に機能する競争を志向することによって、自分にとっての競争の意味だけでなく集団にとっての競争に意味を自覚し、協同的な競争が強く意識されてくることになる。

体育授業における競争を含む教材の指導では、技能の向上を保障することが前提に考えられる必要がある。なぜならば、共通のルールのもとで特定の能力が序列化される過程と、ともに競い合う人間として互いが尊重し合う過程を、児童が気づくのは自らの技能の向上を媒介としてしかありえないからである。

本来、どのような競争観を持つかは児童が選ぶことであり、教師が決める問題ではない。ただし、競争それ自体を教える内容にした授業づくりを行う場合、競争に関する知識は教えるべき到達目標と設定することが可能である。それらの知識の習得と競争観の形成との関係について、一定の構造的な把握が必要である。今後の課題としたい。

#### 注及び引用・参考文献

注)「」で引用した文は、児童の授業での発言または学習カードの記述である。

- 1) 小林一久、『体育の授業づくり論』，明治図書，1985.
- 2) 拙稿，「陸上運動の指導」，木原成一郎編，『初等体育科教育学』，協同出版，2002.
- 3) 森敏生，「体育科教育における『競争を教える』授業の位置づけと展望」，『楽しい体育・スポーツ』，98号，1998.
- 4) 島本靖・北道正浩・影井真樹，「体育授業における競争の指導」，『教育学研究紀要』，第45巻第二部，中国四国教育学会，1999.
- 5) 島本靖・森川敦子，「体育授業における競争の指導(2)」，『教育学研究紀要』，第47巻第二部，中国四国教育学会，2001.
- 6) 島本靖・木原成一郎，「体育授業における競争の指導(3)」，『教育学研究紀要』，第48巻第二部，中国四国教育学会，2002.

付記：なお本稿は、島本靖・木原成一郎，「体育授業における競争の指導(3)」，『教育学研究紀要』，第48巻第二部，中国四国教育学会，2002. の内容を大幅に加筆・修正したものである。